ブラッディ・クライシス

針井 龍郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブラッディ・クライシス

【Ｎコード】
Ｎ０３６９Ｋ

【作者名】
針井　龍郎

【あらすじ】
ある夜、街の片隅で……。――５分企画参加作品――

見事なまでに丸い満月が、そろそろ西方の山の端に入らんとする明け方の七ツ時。淡く空に浮かぶ月は澄み切った光を地上に投げかけ、地面に黒々とした影を象(かたど)る。黒と白に支配された街は音も響かず、まるで冷たい風が時を凍りつかせたかのよう。

しかし、そんな光景も所詮は仮初めにすぎない。もう一時もすれば東の空に朝日が昇り、眩しいばかりの陽光が、そんな錯覚をも溶かし尽してしまうだろう。世界は留まる事を知らず、ただ永遠に変化し続けるのみ。

それこそが、世界の理(ことわり)。唯一例外を許された、不変の事実。

時を同じくして。

未だ目覚めぬ商店街の片隅で、一軒の居酒屋から煌々と灯りが漏れていた。表玄関には紺色の暖簾が掛けられ、白抜きで『みめや』と屋号が書かれている。気をつけていなければ、ついうっかり見落としてしまいそうな、そんな佇まいであった。

その店の暖簾を押し上げて、黒マントを羽織った男が一人、木造の引き戸をがらがらと開けた。

「らっしゃい！」

店の奥から、威勢のいい声が掛る。額に手拭を巻いた店の主人が、包丁を握った手元から顔を上げた。純和風な店の内装に相応しい、まさに絵に描いたかのような居酒屋の親父さんだった。

「おや、黒マントの旦那。今日はもう、あがりですかぃ？」

「うん、今日はもう終わりだ。早いとこ、マスターとこの酒が、飲みたくなったんでね」

男は脱いだマントをくるくると丸めてカウンターの席に置き、自分はその隣に腰を掛けた。洒落たスーツに身を包み、縁無しの上品なメガネを掛けた彼は、どこか異国の貴族のような印象さえ抱かせ

る。
　カウンターには男以外に客はいないが、二階の座敷に通じる奥の階段からは、にぎやかな声が聞こえてくる。大方、団体客が宴会でもしているのだろう。
「毎度ながら、いい加減よしてくださいよ、旦那ぁ。マスターだなんて、こんなじじいが、おこがましいや」
　主人は照れ臭そうに笑いながら、カウンターの下からシェイカーを取り出した。店の雰囲気にまるで合わない異質なそれは、蛍光灯の光を反射して、きらきらと輝いている。
「旦那、いつものヤツでよろしいので？」
「ああ、頼むよ」
　いつも通りの主人の問いかけに、いつも通りに男はうなずいた。
　男は目の前に出されたタオルで手を拭い、慣れた手つきでシェイカーにビンを傾ける主人の様子を、何をするでもなくただぼんやりと眺めた。作業は流れるように進み、やがて軽快な音を立てて振られていたシェイカーは、透明に透き通ったグラスの中を、鮮血の様に紅い液体で満たした。
「はいよ、旦那。じじい特製、『ぶらんでーめりー』だ」
「『ブラッディマリー』だよ、マスター」
　主人が差し出すグラスを受け取って、男は困ったように苦笑を浮かべる。口の端から、八重歯がちらりと覗いた。
「おっと、いけねぇ。まったく、じじいにもなると、横文字ってヤツがどうも苦手になるんでぇ……」
　主人はひょっこりと肩をすくめ、その仕草の滑稽さに二人は同時に噴き出した。
「……そう言えば、旦那」
　ひとしきり笑った後で、主人がさりげなく話を切り出した。
「こんな事を聞いちまうのも失礼ですが、旦那のとこは、最近どうなんですかぃ？　他の客からも、あんまり景気のいい話は聞かねぇ

もんでして」
　男はちびりちびりやっていたグラスをカウンターの上に置き、そして小さく唸り声を上げた。
「んー、そうだね……。あんまり変わらないよ、ウチも」
　そう言って、男は白い筋の混じり始めた黒髪を、気だるげに掻き上げる。指の間からこぼれおちた前髪が、紅く潤んだ瞳に影を落とした。
「今日もあちこち飛び回ったんだけど、その内で上手くいったのは二、三回でね。そんなでも、今日はどちらかというと良かった方でさ。普段なんて、収穫ゼロみたいな日もあるくらいだからね。
　初めて日本に来た頃は、そりゃ景気も良かったもんだけど。いまじゃ、その名残の欠片もないさ」
　昔とは違い、相手の反応が冷たくなってしまった事。家のセキュリティーが高くなり、訪問すらできない事。あげく、痴漢撃退用のスプレーまでかけられてしまった事。
　一通り話し終わると、まいったもんだねと男は力なく笑みを浮かべ、再びグラスに手を伸ばした。『ブラッディマリー』を一口のどへ流し込み、今度は逆に主人へと問いかける。
「マスターの方こそ、大変なんじゃないの？　やっぱり、この不況で店屋に来る客も減ってるの？」
「ウチですかぃ？　まー、しんどいっちゃあ、しんどいですけどねぇ。半分、年寄りの道楽ちゅう感じで続けてる飲み屋ですから。旦那みたいな常連さんが来てくださるだけでも、ウチは十分やっていけるんでさ」
　主人はにやりと笑って、男に向かって片目をつむって見せた。男もつられて笑みを浮かべる。その笑いがどこか寂しそうに見えるのは、果たして気のせいだろうか。
　男は気だるそうに、カウンターに肘をつく。
「時代は変わる、俺たちみたいな古い時代の生き物は、消えていく運命なのかもしれないな」

グラスの氷が、カランと音を立てた。

――その時、カウンターの向こう側からけたたましいベルの音が鳴り響いた。申し訳程度に置いてある、空っぽの水槽の隣。小さな目覚まし時計が、丁度五時を示していた。

「おっと旦那、そろそろ時間ですぜ。今朝の日の出の時間は六時十二分だそうだから、早いこと帰らないと。また奥さんに泣かれちまいますよ」

「ありがとう。マスター、何時も悪いね」

男はグラスに残ったカクテルを一息に煽る。カウンターにお札を一枚置き、傍らのマントを小脇に抱えて立ち上がった。

気がつけば、二階もすっかり静かになっていた。何時の間にやら、団体客も帰ってしまったのだろう。

主人は額に巻いた手拭を取り、カウンターの向こうから回り込んで出て来た。男は抱えていたマントをしっかり体に巻きつける。

「じゃ、また来るよ」

ガラガラと音を立て、男は引き戸を開けた。のれんの隙間から、うっすらと明らんできた空が覗く。夜明け前の静かな気配が、店の中にまで入り込んできた。

「へい、お待ちしておりますんで」

男の背中を、軽く腰を折って送り出す主人。温かな三つの瞳に見送られ、男の姿は朝の靄の中に霞んでいった。

（後書き）

御拝読いただきありがとうございました、針井龍郎です。

この作品は、第四回五分企画参加作品です。このような場を設けていただいた、主催者様である弥生祐様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、同企画には他にも多数の作者様が参加されています。是非ともそちらの方も、読んでいってください。

では、稚拙な文章ですが、これにて失礼させていただきます。また機会がございましたら、針井龍郎をよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0369k/

ブラッディ・クライシス

2010年10月8日15時12分発行